



Title	「焦点」の外延的意味論による解釈一斑
Author(s)	金水, 敏
Citation	語文. 2019, 112, p. 103-108
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/77210
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「焦点」の外延的意味論による解釈一斑

金 水 敏

1. 問題点

久保 (2014) では、情報構造から見た「焦点」について次のように説明している。

- (1) 情報構造では、文は、「前提 (presupposition)」部と「焦点 (focus/information focus)」部に大別され、前者は旧情報を、また、後者は新情報をそれぞれ提供する。その意味で焦点部分は談話において話者が最も伝達したい部分でもある。日本語では、提題の係助詞「は」を取る名詞句が前提機能を担い、格助詞「が」をとる名詞句が焦点機能を担うことは周知のことである。(中略) ちなみに無標文においてのみ、焦点可能な位置 (潜在的焦点位置) は統語的に決定できる (田窪 1987:42)。それに対して、文中に「だけ」のような作用域を持つ「焦点辞 (focus particle)」を含む有標文では、焦点範囲と焦点のずれが生じる場合や二重焦点の問題が生じる。(中略) ちなみに、焦点辞が定める焦点を「束縛焦点 (bound focus)」と呼び、そうでないものを「自由焦点 (free focus)」とよぶ。(p. 307)

ここで、焦点機能を担う格助詞「が」のことを久野 (1973) では「総記 (exhaustive listing) のガ」と呼んでいる。「総記」とは、該当するメンバーすべてを余さず提示するという意味である。ここに、焦点と外延的意味を結びつける契機がある。本稿では、無標文において焦点部が総記の意味を持つ場合の条件を、語用論的意味との関連から説明することを試みる。

2. 文の階層構造と潜在的焦点位置

田窪 (1987/2010) は、南 (1974) の文構造の 4 段階説を修正し、次のような階層を提案した。

- (2) A = 様態・頻度の副詞 + 補語 + 述語

- B = 制限的修飾句 + 主格 + A + (否定) + 時制
 C = 非制限的修飾句 + 主題 + B + モーダル
 D = 呼びかけ + C + 終助詞 (田窪 2010: 8)

これらは、それぞれ次のような統語範疇と対応する意味タイプを表しているとする。

- (3) A = 動詞句 動作
 B = 節 事態
 C = 主節 判断
 D = 発話 伝達 (同上)

この構造において、潜在的な焦点位置はB類より内部の構成素であるとする（ただし、B類の制限的修飾句を焦点のスコープに収めるためには、「の（だ）」を文末に付加する必要がある。Kuno1982; Takubo 1985; 野田 1997）。

3. 「総記」について

久野（1973）では、「が」に三つの異なった用法があるとしている。

(4) a. 総記を表わす「ガ」:

太郎ガ学生デス。

(「今話題になっている人物の中では）太郎だけが学生です」の意味)

b. 中立叙述を表わす「ガ」:

雨ガ降ッテイマス。

オヤ、太郎ガ来マシタ。

(観察できる動作・一時的状態を表わす)

c. 目的格を表す「ガ」:

僕ハ花子ガ好キダ。 (p. 28)

なお、「誰ガ学生デスカ。」と聞かれた場合、「聞き手は、自分の知る限り、該当者・該当物を全て列挙しなければならない。例えば、太郎、花子、次郎、三郎が話題の中心で、そのうち太郎と花子が学生だとした場合、「太郎ト花子ガ学生デス。」と答えなければ彼は嘘をついたことになる、としている (pp. 32-33)。「総記

(exhaustive listing)」とはそのような観点から名付けられた。

また、主題の「ハ」と中立叙述・総記の「ガ」の区別は従属文中では中和されるともしている。

(5) a. 君ハ [太郎ガ日本語ガデキル] コトラ知ッテイマスカ。

b. [太郎ガ好キナ] 子ハ花子デス。 (p. 33)

この久野の一般化では、「が」の意味的な分類として中立叙述や総記（そして従属文中の中和した「が」）があるかのように読めるが、「が」は単に格表示の機能を担うだけであり、総記の意味は焦点化された場合の特徴として考えるのが適当である（金水・今仁 2000: 144）。すなわち、焦点は「話者が最も伝達したい部分」であるので、グライスの「協調の原理」のうち、「量の原則」が働くのである（Grice 1975）。

(6) 量の原則 (maxim of quantity)

会話での情報の提供は、ほどよい量でなければならない。

(Make your contribution as informative as is required (for the current purpose of the exchange). Do not make your contribution more informative than is required.

(金水・今仁 2000: 142)

即ち、総記の意味はこの量の原則から導かれる語用論的効果であると考ええる。

なお、「が」の本質が格表示であるとするならば、他の格助詞もまた焦点化されれば総記の意味を持つと予測されるが、この予測はおおむね正しい。

(7) a. 「田中さんは図書委員に誰を推薦しましたか。」「山田さんと吉田さんを推薦しました。」

b. 「容疑者は誰に賄賂を渡しましたか。」「A議員とB議員に渡しました。」

(7)ではいずれも、知っている限りで全ての該当者を挙げるのが文脈的に要請される（むろん、該当しない人間を付け加えることは許されない）。もしこの観察が正しければ、「総記のヲ」「総記のニ」も設けないといけないことになるが、これは理論の構成として不適切である。ただし「が」は主格助詞であるが故に、「を」や「に」にはない“特立性”を表しやすい性質が備わっているとも言えそうであるが、格助詞間の相違についてはこれ以上触れない。

4. 「総記」の外延的意味論による解釈

- (8) a. 地球が太陽の周りを回る (こと)。
b. 地球は太陽の周りを回る。

(8a) はコト化されたB類の節で、事態を中立的に表す。では、「地球」が主題化された(8b)はどう解釈できるか。(8b)は、主題の「地球」と、「地球」を取り除かれた焦点部「 x が太陽の周りを回る (こと)」の二つの部分に分けられる。それぞれの外延を、集合の包摂関係で表せば、次のようになるであろう。なお、郡司(2015)その他の記法に倣って、 $[\phi]$ は、表現「 ϕ 」の外延を表すこととする。

- (9) $[\text{地球}] \subseteq [\lambda x [x\text{が太陽の周りを回る}]]$

すなわち、 $[\lambda x [x\text{が太陽の周りを回る}]]$ は太陽の周りを回るものの集合を表すので、(9)は「地球」(の指示対象の個体)がその集合に包摂されることを表す。またこれは、「太陽の周りを回る」ことが「地球」の属性として示されていることを表すとも言える。一方、

- (10) 「○○派からは誰がパーティーに来ましたか」 $[\text{A議員とB議員が来ました}]$

の場合、前提部は「○○派から x がパーティーに来た (こと)」であり、焦点部は「A議員とB議員」である。この場合は、

- (11) $[\lambda x [\text{○○派から}x\text{がパーティーに来た}]] \equiv [\text{A議員とB議員}]$

となる。すなわち「○○派からパーティーに来た」人の集合と「A議員とB議員」という集合が同値関係となるということである。この同値関係こそが「総記」の外延的意味としての解釈である。

では、なぜ(8b)の主題と焦点部の関係は包摂関係になるのに、(10)は同値関係になるのか。それは焦点部が命題の述部であるのか、命題の項であるのかという違いによると考えられる。それぞれの焦点を、「述部焦点」と「項焦点」と呼んでおこう。即ち、述部焦点であれば主題名詞句が述部に包摂される関係を表し、項焦点であれば同値関係を表すこととなる。焦点部にグライスの量の原則が同様に働くとする

ればこの違いはどこから来るのだろうか。それは、述部焦点は主題名詞句の属性を正しく記述することが目的であるのに対し、項焦点は主題部が表す集合のメンバーを過不足なく提示することが目的であるからと説明できる。

5. 名詞述語文について

西山 (2003) で示された名詞述語文の外延的意味による解釈を示そう。

(12) a. 2は素数だ。[[2] ⊆ [λx [xが素数である]]] : 措定文

b. 2, 3, 5, 7が10以下の素数だ。[[λx [xが10以下の素数である]]] ≡ [2, 3, 5, 7] : 指定文

c. 10以下の素数は2, 3, 5, 7だ。[[λx [xが10以下の素数である]]] ≡ [2, 3, 5, 7] : 倒置指定文

(12a) の措定文は述部焦点であり、主題名詞句と述部が表す集合は包摂関係となるが、(12b) の指定文は項焦点であるので、総記即ち同値関係の意味が現れる。また (12c) の倒置指定文は、「2, 3, 5, 7だ」の部分が統語的には述部であるのに、意味論的には項焦点の解釈を受けるという点が特殊である。

述部とはほとんどの場合、主体・対象の静態的な性質や時間的な変化など、属性や属性の時間的展開を指し示すもので、属性の観点から世界における外延を指し示す。一方、焦点解釈を受ける項は、集合のメンバーを直接列挙する形で提示されている（要素が1個だけでも列挙の一種と考える）。このような形式の名詞句あるいは名詞句相当の表現形式（並列形式）を、金水 (2015) では「リスト表現」と呼んでいる。即ち、本稿で言う項焦点は基本的にリスト表現の形式で表されていると言える。

名詞述語文の特徴は、述語が形容詞や形容動詞のような属性を表す（すなわち措定文）場合もあれば、リスト表現によって項相当の集合を列挙して指し示すこともあるという点である。名詞述語文は基本的に、二つの名詞句によって指し示される集合のさまざまなマッチング（包摂または動詞関係）を表現するための形式であるので、このように述語らしくない（項のような述語）も述語に立ちうる。そうであるが故に、倒置指定文やウナギ文（奥津 1978; 西山 2003; 金水 2016）や（疑似）分裂文（例「パーティーに出席したのはA議員とB委員だ。」）のような表現が可能になると考える。

6. 最後に

本稿では、自由焦点を述部焦点と項焦点に分け、述部焦点は包摂関係、項焦点は「総記」すなわち同値関係を表すということ述べた。今後は、本稿の仮説に基づき、名詞述語文および（疑似）分裂文の統語・意味論についてより詳しく分析する機会を持ちたい。また、主題構文、「～だけ」「～しか～ない」等の束縛焦点との関連についてもより考察を深めていきたい。

参考文献

- 奥津敬一郎 (1978) 『「ボクハ ウナギダ」の文法：ダとノ』 くろしお出版。
金水敏・今仁生美 (2000) 『意味と文脈』現代言語学入門, 4, 岩波書店。
金水敏 (2015) 「「変項名詞句」の意味解釈について」『日中言語研究』 8: 22-32。
久野暉 (1973) 『日本文法研究』 大修館書店。
久保進 (2014) 「焦点」日本語文法学会 (編) 『日本語文法事典』 pp. 307-308, 大修館書店。
郡司隆男 (2015) 「日本語のコピュラ文の形式意味論的分析」『Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin: トークス』 18: 13-24, 神戸松蔭女子学院大学。
金水敏 (2016) 「「ウナギ文」再び：日英語の違いに着目して」福田嘉一郎・立石始 (編) 『名詞類の文法』 pp. 203-214, くろしお出版。
田窪行則 (1987) 「統語構造と文脈情報」『日本語学』 6-5: 37-48, 明治書院。
田窪行則 (2010) 『日本語の構造—推論と知識管理—』 くろしお出版。
西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句—』 ひつじ書房。
野田春美 (1997) 『「の (だ)」の機能』 くろしお出版。
南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』 大修館書店。
Grice, H. P. (1975) “Logic and Conversation,” Cole, P. and Morgan, J. L. (eds.), *Syntax and Semantics, 3: Speech Acts*, Academic Press.

(きんすい・さとし 本学大学院教授)